

大会挨拶

早慶対抗戦によせて

慶応義塾大学 平 良
バドミントン部長

バドミントンは「遊び」の形ではかなり多くの間にひろまっているだけに、今年の女子ユース杯の獲得はおそらくこれからのバドミントン界に少くない刺激を与えることと思う。特に、比較的雨の多いわが国で適当な屋内スポーツとして（ちようと、寒くて長い冬のイギリスで発達したように）将来の発展が期待出来るだろう。他のスポーツにくらべてわが国に伝来して比較的日が浅いことから今までは忘れられがちであったが、これからは「成人」したスポーツとしての責任も負わされるであろう。今までの先駆的な役割に加えて一層の努力が望まれるのである。

親しい兄弟である二つの大学の間で互に刺激し生長することがわが国のバドミントン界を益するところとなるう。どうか、プレーにおいてもマナーにおいても最善をつくし、多くの成果をえられるように祈っている。

早稲田大学 岩片秀雄
バドミントン部長

恒例の早慶定期戦もこの度第14回目を迎えることになり、近く早大記念会堂で両校のOBと学生諸君が日頃鍛えた腕前を十分に発揮して雌雄を決し合うことは誠に喜ばしいことである。

全国高校体育大会が目下秋田市を中心に各地で開催され、25種目に亘つて若人が熱戦を展開しているが、このようにバドミントンが全国的に普及され青少年男女の間に異常の関心と深い理解がもたされ、急速にバドミントン人口が増加しつつあることは我々関係者にとつて誠に御同慶の至りである。

しかしながら、最近ややもすると大学体育部の在り方について兎角の批判のあることは事実である。青少年の健康増進と民主的精神訓練の場である等の体育部が優勝を焦る余り部員に過度の練習を押しつけたり、あるいは本来の使命を忘却して特種団体に加担するが如き行動は誠に慎まねばなるまい。

今秋の早慶戦は何れの大学に栄冠がもたされるかは別として、日頃鍛えた技術と精神力とを十分發揮して火の出るような熱戦を展開して戴くよう念願してやまないのである。

先 輩 挨 拶

早慶定期戦によせて

慶大OB 吹野家寿吉

毎年九月に入ると秋のシーズンの先頭を切つて恒例の早慶定期戦が行われるに当り過去14回にわたる戦績は別として最近の塾の成績不振について日頃感ずる一端を述べて置きます。最近の塾の不振の要因の一つは「熱意の不足」ではないでしょうか？現在の塾の部員は運動は単にスポーツとして楽しくやり健康を保持すれば良いと思つてゐるのではないだろうか？自分の技術の向上の為毎日の練習に又は日常生活の内にも常にバドミントンをややる為に必要なであり有益であると思われる事を取入れて練習その他に心掛けてやつてゐる者が果して何人居るだろうか？実力が劣つてゐる者が強い相手と勝負して勝つ為には相手が3時間練習すれば自分は5時間6時間やる丈の熱意と情熱がなくてどうして勝つ事が出来るだろうか？

早稲田大学が過去の劣勢から今日の實力をつける迄諸先輩並びに部員諸君が並ならぬ努力と熱意を持つて勵んで来られた結果が今日の成果として現われているのだと思います。我々は今早稲田大学諸子の扱われた此の努力と熱意は無条件に学ばねばならないと思います。運動部に於ける対外試合は常に勝負であります。日常生活又は親しい友人とやる娯楽とは異なるものであります。娯楽又は趣味ならば勝負にこだわらずに楽しくやればそれなりの目的を達するのであります。但し早慶戦は各々の大学を代表して行う対抗戦でありあくまでも勝負であります。私は勝負は常に勝たねばならないと確信します。勝つ為に全力を尽すべきであると思います。試合前から相手が強いから負けて当然だなどと言う考が若しあつたならば之は全くスポーツ精神を汚す態度と謂わなければなりません。自己の持てる全力を出し切つて負けるならば負けたとしても立派な態度と言えましょう。

どうか塾部員の諸君正々堂々と全力尽して斗つて下さい。そして諸君の努力の積み重ねがやがて近い将来早稲田大学を破り又関東リーグ戦で立派な成績を獲得する事になると信じます。恒例の定期戦の御挨拶としては異例だと存じますが伝統ある早慶定期戦に際し特に皆様方の御許しを得て苦言を述べ塾部員の奮起を促す次第です。

早大OB 津田信一

昭和二十七年神戸に於てインカレが行なわれた時、今は亡き慶応の奥井復太郎先生、当時のキャプテン石田敏秀氏にお願いして出来た早慶バドミントン定期戦も回を重ねて第14回になり誠に感慨深いものがあります。

その当時力の差、キャリアの差は如何ともしがたく、私は十年間は胸をお借りしたいその後は必ず同等迄こぎつけますと事あることにお願ひして参りましたが、過去の成績は十一連敗でやつと十二回に至り勝利を取めたことにより、胸を借りた恩返しが出来たと思つて居ります。

恩返しはしましたが、現在の慶応は非常に苦しい立場にあり、昔の我が部を思い出し一日も早くすばらしい慶応になつて頂きたいと思つて居ります。

現在早慶両校共、有力選手の入学時に於ける困難さは、たいへんなもので、その意味でも今迄の余勢による練習、試合はやめて、苦しみの中に最も有効な練習の積み重ねにより、昔から兵藤先生その他の方々の云われているスポーツ界は早慶がリードして高峰となり得たいものです。そのためには部自体の質の向上と、フライングプレーよりもフエアプレーの精神で堂々と他校を押し、名実共にすばらしい部にする様全員一団となつて努力しようではありませんか。

早慶バドミントン定期戦に寄せて

小 宮 淳 宏

この大会も今年で十四回目に当る。試合数も多くなつて居るし、今回からOGの部もあるとか、観覧者も増え世間の興味をひく様になつてたいへん嬉しい。この間幾多のすべれたプレイヤーがその時の勝敗をかけて、しのぎを削つて来た。今後も存続し競技内容も益々高められるべきである。日本のバドミントンも世界のトップレベルにあることが最近の種々な国際試合で実証されて居る。

この様な世界的な競技会で早慶両校の選手諸君はもつともつと活躍して欲しい。この早慶定期戦がすべての点で充実し存続するためには、「両校のチームは夫々の伝統を受け継ぎ、真剣にプレーをし、チームワークをつくり、試合場でしるぎをけつり、その夜は仲良くパーテイーにのそむ」……これはまことにうるわしい。学生スポーツのお手本的なあり方であろう。しかしひるがえつて私について云うならば、若し私が現在プレイヤーであつたならとてもそんなお手本的行動はとれない。私は心が狭く執念深いから、点をとられた相手を自分の間敵として扱うし、まして敗かされた奴には憎悪の念をもつてしか接しられなかつた。口惜しくて口惜しくて次の機会には必ず一あわ吹かせてやろうとあの顔を見る度に思つたものだ。これは自分のチームの一員であらうと他校の選手であらうと同じである。少しオーバーな方になつたが敗戦の口惜しさは一週間や二週間でないやせるものでなかつた。

ゲームのあとのパーテイーで全選手が仲良く歓談して居るのを見るとみんな心が大きいのか或いは自分より強い奴の存在がそんなに気にならないのか、何故ゲームとパーテイーで感情をかんたんにわりきれるのか、私には理解しにくい点が多い。もつとも現在の日本のバドミントン界は選手の層があつたから、一人前になる迄に負けなれてしまつて、一々気にしているゆとりもないのかも知れない。やつぱりみんな苦勞して居るのだろう。

今年の六月に私はユ杯の日本チーム監督として歴戦した。コーチに早稲田OBの福井さんを起用したのは、彼の援助が必要だつたからであつて、早稲田の手の内をさぐつて最近増えている借りを返すのが目的ではなかつた。けれど今後はいくらかそのためにも役立てたい。ユ杯戦でも試合後のパーテイーは数多くあつた。幸いにわがチームは連戦連勝であつたから常に王者としてのぞんだ。私としてはきわめてよい心持ちであつた。敗けたチームはどここの国もつとめて冷静に明らかに友好的であつたが心中煮えくりかえつて居るのがよくわかつた。「そうだろうそうだろう。それでなくではこつちも面白くない。」「それでこそ敵作ら同じ競技に打ち込む仲間として遇することが出来る。」

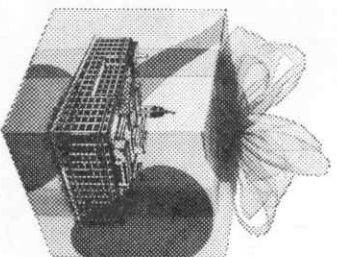
この競技はチームのプレーではない。個人の競技であつて、自分以外にあてになるものは一つもない。又大変に心理的なものが強く作用する競技であつて一人りだけの力で相手をやつつける心構えが第一に必要である。この孤独感を身にしみて味わつたものが集つた処に一つのチームが出来来る。私が始めて出場した試合は神奈川県選手権大会の新人の部で、これに優勝して欲が出た。この時は先輩連中が文字通り手をとり足をとりの応援とコーチをしてくれた。レギュラー選手となり種々な試合に出る様になるし私に対する応援やコーチにも役に立つものと全く見当違いなものがあることが分かつて来た。今では一年に一度の早慶戦のOBの部が唯一の残された試合である。同情に満ちた応援をしてくれるがサイドコーチは全然無い。私は狭量で執念深いけれどもプレイヤーを止めた時から極めておおらかである。かつて憎悪的であつた好敵手は心の通い合う親友と変つた。一年に一度のOB戦でコテンパンにやつつけられても五分後にはそいつと仲良く話し合える。これは体力が無いしロートルだから当然のことだし又私にもうバドミントンが出来なくてバドミントンごつこをやつて居ることを自覚して居るからだ。早慶両校の現役選手諸君よ。蛇足だろうがバドミントンごつこは私達OBにまかしておいてもらいたい。諸君はトマス杯とユンバ杯を目指して、その前の一つの関門として早慶戦をカーパイ戦いきびしく精進して下さい。

慶応や早稲田の女子部員がユニバー杯日本代表の一員であったというのであれば、早慶戦に多少の関係も生じようが、残念ながら現在はその様なことはないのが事実である。たまたま、この世界女子選手権に参加した日本チームの小宮監督が慶応出身であり、コーチであった私が早稲田出というだけでこの早慶戦のプログラムに一文を草するのはいかにもそぐわない。わずかに早慶戦らしい雰囲気といえ、小宮さんと私が数回の強化合宿中、幾度かシングルス試合練習を行ったことであろう。両者の対戦成績はさておき、小宮さんがかいつか「シングルスに強い者は、その過程において何かしら思索した跡がある」ということを言われたことがあるが、その言葉に最近つくづく考えさせられている。この言葉を私なりに解釈させて貰うならば、その思索のつなが試合の度に細くなり、ぼろぼろになり（分り易く言えば負ける度ごとにということだ）、そのつなの中を前以上に少しでも大きく、広くする為にプレイヤーが思索することであろう。何をどうゆう風に思索するかは個人差による。あるときは技術であり、体力であり、またあるときは心理学であり、用具であつたりするだろう。この個人差に相異があるのは当然であり、従つてその思索の中にも差異が生じてこよう。

ここでパドミントングレードに於て(特にシングルスゲームでは)精神的なものが占める位置が大きという事実が立証されると思われる。その意味ではインド・ニューゼーランドへ同行した女子選手一同は全く思索の中が広がつたように思われる半面、早慶の現役諸君にはものたりないものを感じるは事実である。

願わくば現役諸君、大いに思索し優秀な先輩に伍して天下に雄飛してもらいたい。

流行のトップをゆく
 フアツションの
 伝統の
 みやびなきもの...
 産地直送の
 香りゆたか
 な風味...
 ハイセンスの
 リビング用品...
 いいつもの暮らしの
 夢をおくる三越の



三越

受けて重宝 三越の商品券

日本橋本店・銀座・新宿・池袋・丸の内(以上東京)・大阪・神戸・高松・松山・仙台・札幌

早慶定期戦と共に十四年

慶應義塾大学 金坂俊平
三年 経済学部

今年第14回を迎えた早慶バドミントン定期戦は、私が大学一年の時発足したので、定期戦の回数が、私のバドミントンの経験年数になり、早稲田の方々との付き合いの年数にもなりますので、回数が増えて行くのを非常に楽しみに致して居ります。

ただ、過去圧倒的優位であつた塾が、近年は関東リーグで二部に落ち、定期戦でも劣勢である事が非常に残念に思います。しかし早稲田の諸兄にも同じ様な苦しい時代が長く続き、慶応に追いつけ、追い越せの努力が、今日の結果を生んだものと推察致して居ります。今度は塾が早稲田の先輩諸兄、現役諸君の指導を受け、早稲田を目標に努力する時です。そのよき機会、早慶定期戦がやつて来ました。両校共、親しみの中にも激しい対抗意識を持ち、早稲田にだけは負けたくない、慶応にだけは負けたくないという気構えを持つて、すばらしい試合を見せて戴きたいと思ひます。そして両校相競い合い、早慶戦の勝者が、事実上日本のバドミントン界を制するという、最高峰の定期戦を迎える事を期待致して居ります。

私も第二回定期戦から出場させて戴いて居りますが、今や日本のバドミントン界も世界の一流国となり、競技人口も、観客も増大しつつある時、伝統ある早慶定期戦のOB戦を経験出来る事を、非常に幸せに感じて居ります。そして早稲田の諸兄とのお付き合いの年数が増々長くなる、早慶定期戦の回数を、今後も楽しみに数えて参ります。

早慶定期戦に寄せて

早大OB 堺 栄 一

今年も早慶定期戦がやつて来ました。学窓を去つて早くも四年、年毎にこの定期戦を迎えるのが楽しくなつて来ます。これも、初秋の一日、多勢の両校現役、OBが一堂に会し、コートを走り廻り、好プレー、珍プレーに拍手を送つての交歓風景は日本のバドミントン界に類のないすばらしい定期戦であるからだと思います。

さて、早稲田は眼を覚ました。一昨年慶応の連勝にストップをかけ、溜まりに溜まった借りを返さず事が実現し始めました。そして昨年も無事、勝利を納めました。これで両眼が開いた訳です。これからは慶応に負けない連勝記録をつくるべく努力したいと思ひます。勿論その道の険しい事は、最近の慶応の監督さんはじめOB諸氏の活発な動きから推し測る事が出来ます。しかし早稲田もこれに充分対抗して行かなければなりません。

そして早く定期戦の勝敗が学生バドミントンの王座を争うようになる事を切に望んでおります。

高校生ナンバー

慶応義塾高等学校

主	将	吉村俊秀	3年	慶応義塾普通部出身
副	将	小野沢利夫	3年	〃
主	務	西尾嘉明	3年	慶応義塾中等部出身
選	手	角田進	3年	〃
〃	〃	田中克治	3年	〃
〃	〃	山崎英明	3年	千代田区立一橋中出身
〃	〃	鈴木英夫	2年	慶応義塾普通部出身
〃	〃	水鳥秀和	2年	〃
〃	〃	肥沼英司	2年	〃
〃	〃	浅沼信行	2年	〃
〃	〃	高橋良和	2年	渋谷区立上原中出身
〃	〃	安部雅文	2年	杉並区立井荻中出身
早稲田大学高等学院				
主	将	矢口重夫	3年	牛込第一中学校出身
主	務	新津寛	3年	開進第四中学校出身
選	手	田中昇	3年	四谷第一中学校出身
〃	〃	鈴木雅雄	2年	文京第十中学校出身
〃	〃	塚田真人	2年	開進第三中学校出身
〃	〃	徳重芳	2年	白幡中学校出身
〃	〃	丹羽三郎	2年	湘洋中学校出身

慶応義塾大学メンバー

部長	良一郎	慶応義塾大学教授	
副部長	上宏	〃 高校教諭	
監督	川吉	昭和32年経済学部卒	
チ	宮永	昭和38年商学部卒	
将	伊丹	(経済学部4年)	麻布高出身
主	瓜生	(商学部4年)	向陽高
ツ	田池	(文学部4年)	下田北高
マネージャー	善光	(法文学部4年)	富山中部高
副	善忠	(法文学部4年)	千才高
選	健俊	(商学部3年)	緑ヶ丘高
手	小方	(法文学部3年)	慶応日部高
	千大	(商学部3年)	春日野高
	餘野	(法文学部3年)	長野宮高
	門倉	(法文学部2年)	聖光学院高
	西山	(法文学部1年)	上市田高
	平井	(〃)	秋田市立高
	佐藤	(経済学部1年)	慶應
	佐々	(〃)	慶宮高
	本牧	(〃)	
	芳賀	(〃)	

大学女子メンバー

女子選手	北島	綾子	(文学部2年)	慶応女子高出身
	五味	幸子	(〃)	
	川崎	美耶	(文学部1年)	
	加集	悦子	(〃)	
	五十	嵐優	(〃)	豊多摩高出身
	富田	鮎子	(〃)	東京女学館
	三原	桂子	(法学部1年)	桜蔭高

早稲田メンバー

岩河菊子	片村地崎	秀秀利一	雄平明幸	早稲田大学教授	昭和三十二年商学部卒	関東学院六浦高出身
〃	井上沢	祐一	勲一	〃	昭和38年	熊本高
折田安南	折田安南	佐武一	尚幸之	(政経学部4年)	(政経学部4年)	新高岡高
〃	林村	弘	誠郎	(法政部4年)	(法政部4年)	福岡高
〃	橋本	太剛	司治	(教育学部3年)	(教育学部3年)	聖学院高
〃	橋本	茂	利徳	(政経学部3年)	(政経学部3年)	熊台二高
〃	森	宗正	修久	(教育学部3年)	(教育学部3年)	新高潟高
〃	大鬼西	敏清	志雄	(文学部3年)	(文学部3年)	仙台高
〃	金白	藤川	久志	(法学部3年)	(法学部3年)	芝目高
〃	藤峰	岸江	雄	(商学部2年)	(商学部2年)	弘仙高
〃	阿近	藤	繁治	(教育学部1年)	(教育学部1年)	小石川高
〃	藤	伸	治	(社会学部1年)	(社会学部1年)	神木高
〃	出	淵	子美	〃	〃	新更津高
〃	佐藤	佳真喜	子美	(政経学部2年)	(政経学部2年)	高岡高
〃	宮磯	登井	録子	(文学部3年)	(文学部3年)	三田高
〃	大月	てる	子美	(文学部2年)	(文学部2年)	武蔵高
〃	三村	悦	子美	(教育学部1年)	(教育学部1年)	捜真高
〃	〃	〃	〃	〃	〃	熊谷女子高
〃	〃	〃	〃	〃	〃	日比谷高
〃	〃	〃	〃	〃	〃	戸神高

女子大学メンバー

女子選手	出	淵	佳真喜	子美	(文学部4年)	高岡高	出身
〃	佐藤	藤	登井	録子	(文学部3年)	三田高	〃
〃	宮磯	大月	てる	子美	(文学部2年)	武蔵高	〃
〃	大月	林上	悦	子美	(教育学部1年)	捜真高	〃
〃	三村	〃	〃	〃	〃	熊谷女子高	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	日比谷高	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	戸神高	〃

主 将 抱 負

早 慶 戦

慶応義塾体育会
バドミントン部主将

伊 丹 昭

早慶戦この言葉は一種独特の感じを我々にあたえてくれます。まだ選手になる前は、早く早慶戦に出場したいと憧れ、選手となれば早慶戦に出場できることを非常に誇りに思うのであります。そしてどの部員もただ非常に快い気持ちにひたるのであります。ところが一昨年よりどうも様子が違ってきました。それは去年、一昨年と早稲田に敗けてしまったからです。常勝しているときはただ気持ちのいいだけのものですが、今や「なんとかして早稲田に勝ちたい」そう思う気が強くなってきました。最近他の運動においても慶応は劣勢のようです。これがまた「早稲田に勝ちたい」という気持にはくしやをかけます。二部の慶応が一部の早稲田を倒す。こんな気持ちのいいことはありません。この打倒早稲田の目標を達成するために夏日吉でみっちりトレーニングをし富山で十日間の非常に充実した有意義な合宿を終えて万全の態勢でこの早慶戦にのそんでいきます。今迄の二回の敗因は何れも下級生の弱さでありましたが、幸にして今年は合宿での下級生の台頭はめざましく慶応に勝利をもたらす原動力となつてくれることと思います。

秋のシーズンの最初の試合、早慶戦を勝利で飾るために選手はもちろんのこと選手以外の部員もしてOBの方達と部をあげて準備をととのえました。どうか慶応の闘志あふれる戦いつぶりを御期待ください。

早 慶 定 期 戦

折 井 勲

最上級生となつて早慶定期戦を目前にして思い出すのは一年生の時の早慶戦です。あの時は完敗を喫し全員秋風に頭皮をさらしたものです。しかしそれ以来二連勝し今年はさらに記録を伸ばすべく夏期合宿に於ても慶応大学OBであられる宮永さんにも御指導願ひ下級生もよく頑張つてくれ格段の進歩を遂げた者もおります。又我が部も創立15週年を迎えました。現役一同この記念すべき年に敗けてはならじと必勝の意気に燃えております。

勿論慶応さんも我が校の三連勝を阻まんと練習を重ねておられることでしょう。お互に正々堂々と全力を出し合つて早慶戦の名に恥じない立派な試合をし又、早慶戦が日本いや世界をリードする大会に成長させる礎となるよう頑張りました。

最後に審判の労を尽くして頂く法政大学の皆様は心からの感謝の意を表してペンを置きます。

早慶戦によせて

法大主将 鈴木健二

伝統ある第14回早慶バドミントン定期戦が酷暑の折早大記念講堂で開催されることは私共学生界にとつては非常に有意義であると思います。現在日本のバドミントン界における学生の活躍は目を見張るものがあります。一方トーナメント杯には日本選手が大活躍をし、女子ユーバー杯においては常勝アメリカチームに完勝し初参加にして第四回ユーバー杯を獲得し、世界の王座につき今や日本のバドミントンは世界に確固たる地位を占め、その動きは今後世界の注目を集めるものと思います。

その中で第14回早慶バドミントン定期戦が行なわれますが特にOB戦、女子戦、高校戦現役戦等種々さまざまな試合があることは定期戦上最もすばらしい大会であると信じています。学生バドミントン界最高の伝統を持つ慶応大学、一母校においては上位進出可能な早稲田大学、過去の対戦成績が十一勝二敗と圧倒的に慶大のリードですが回を重ねることに充実し、一層面白みのある大会となり今回も相当白熱した試合となると思います。一部返り咲きをねらい過去の伝統からどうしても負けられない慶大、今までの雪辱を目指し三連勝の意気ごみの早大、伊丹、大嶋、千葉対関、橋本、折井、安次等がいかに戦うか、両校とも最高のコンディションで持てる力を十二分に発揮し、期待に遺憾なく応えられる試合を切望致します。

先にも言いましたが学生の我が国バドミントン界に果す役割は極めて大なるものがあると思います。この大会も見事成功致し早慶両大学の熱意と努力は現在の榮譽を将来に引継ぐ原動力であると確信しています。本大会が学生バドミントン界の力強い息吹きとなることを期待し成功されることを望み私の言葉と致します。

想 い 出

慶大OG 片石千鶴子 (旧姓佐藤)

十年一昔と云うが、女子が入部してから一昔処が十二年もたつてしまつた。昔々の話である。何しろバドミントンを始めて最初の試合が全日本東京予選、そして二番目が慶早戦であつた。場所は杉野体育館で女子部員は六名、夫々一試合ずつ出場する事になり自分が出場する迄は何とも表現しようのない気持であつた。1セットは無我夢中で二セットになりやつと生気を取戻し勝利を収めたが、女子の成績ははかなくも二勝三敗に終つたのであつた。三田新聞の観戦記に「女子は景物か」と書かれたのには一同大憤慨したものである。それから皆バドミントンの虜となり全くバドミントン第一の生活を送つたものである。六名いた部員が四人になつた時などは好きなスキーも怪我をしてリーグ戦に出場出来なくなつてはと断念したり、練習前の映画見物は目が疲れるからと見なかつたり全くバドミントンに対して忠実そのものであつた。その甲斐あつてか関東では全タイトルを獲得し、全日本学生では団体のみではあるが二位に活躍したのであつた。

思えば皆バドミントンの虫であつた。当時は体育館がなかつたのでいろいろの場所へ練習に行つたが他校の練習風景を見る事が出来たので自分達の殻の中のみ居らずに却つて好結果であつた。上級生と衝突した事もある。そしてトレーニングが辛くて明日はもう休もうかと思つた事も何度となくあつた。毎日退部届をバックの中に入れておいた者もあつたが、四年間で得たものは他では得られぬかけがえのないものである。今は夫々に家庭の主婦となり昔話として懐かしく思つている事であろう。ラケットを握らなくなつてから六年になるが人のやつているのを見るとやつてみたいと思ふ。やつて見たいという虫が機会到来の期を伺つているようである。が今は全く想い出としてのみ心の中に留つているのみである。

バドミントンの現状

昭和19年卒慶応OB 森友徳 兵衛
日本協会 理事 長

日本のバドミントンが昭和10年から始められて丸30年を経過した。協会創設が戦後の昭和21年であるから、戸籍上は丸20年ということになる。この間は短いようであったことは日本バドミントンの歴史を振り返って見るとつくづく判る。一区切がついた所で女子チームが世界選手権（ユバーカップ）を取った。男子の秋山選手が全英選手権でフレイナルグレイヤーとなった。この二つの功績は日本のバドミントンが世界のバドミントン史に一言を費させる価値のあるものである。

国外に於ても男子はチームとして世界5位にラシクサされ1967年には3位以上を相うチャンスを迎える人ではテニスで過去の金字塔となつてはいる、チルデン対清水の全英決勝戦の位置に既に到達しているのである。私達が研究して野望に駆られるでもなく自分のプレーヤーの向上とより強いものを倒すという熱意のみで地道に築き上げて来た結果である。貧乏から身を起した立身出世のような美談も、血のにじむ涙話もない。黙々として荷を背負い休むことなく一歩一歩と歩きつづけて来た結果、到着する所に到着したという感じがしない。我々はもう元来た道に戻るようなことはしまいと誓おうではないか。またもう一つの遠い宿場に向つて歩き初めようではないか。「努力」あるのみだと思ふ。

世界の舞台がトマス杯、ユバー杯のチャレンジャウソフとするとまたウエソグレイヤーであるとする。楽屋はロンドンのカフテリヤである。昨年は世界で10名しかいない理事に高倉氏を送った。しかもブルーナー会長の推薦でソネル副会長の保証である。本年再選され世界選手権委員会委員となつた日本から理事になつて貰わないと困るというのである。楽屋でも日本のバドミントンは着々と地歩を築いておりプレーヤーの活躍と一緒である。目下のIBFの問題は二つにしぼられてはいるといつてよい。一つは投票権の偏重是正であり。一つはフレイムショット復活である。私がバドミントンを初めた昭和15年は今と同様のルールであつて違つていたのはサービスのネットインがレットであつた。それがレットでなくなり、またフレイムショットが禁止された。禁止時代は一長一短であつて主審による判定の誤差とゲームの盛り上の不自然なる中断であつたと思う。ワレーシアを中心とするフレイムショットOK運動は三年間に亘る戦いの末、次第にシンバサイザーを獲て、日本の二票を含めて60対30のギリギリで禁止解除に成功したのであつた。ローズオブバドミントンの改正には全投票権の3分の2が必要なのである。今やまたOKIに対する害悪が大であるとする英国本部が中心となつての運動は昨年の失敗から今年は4票の出入で3分の2を獲得するという線に寄せて来た。プレーヤーの最も大切なこのような規則の重大な変更が毎年二派の優勢で左右されるような状態で推移していてもよいものだろうか。日本はこの点ではアジア地区と同調してフレイムショットOKに筋を定めてある。67年のトマス杯開催地ジャカルタも種々の異説はあつても規則通りの線を貫いている。将来共に日本の代表は左右に偏せず定見を以て進むことである。投票権の偏重とは英国の何とか伯が5票持つていたり議員でない役員に不均等に票が偏つて現状に対する刷新である。ワレーシアはこのことを植民地主義の名残りと酷評するが、一面から見ると歴史を守り革命から黨技を救つてはいる功績もあるであつて本部強権は一概に罪悪と決めつけるわけにもいかないだろう。併し新しい波はバドミントンにも寄せて来ていて、加盟国全体が運営するというきわめて当り前の方法がとられるようになることは遠い将来ではあるまい。この点我々も新体制に同意しながらも早急なる移行には注意を払わざるを得ない。昨年から本年にかけて本部は各ゾーンから新会長が出るように変えたこれは民主的運営への一歩前進であることに間違いない。日本が男女の選手権を制圧するときには、それを機会に大きく専制主義はゆれ動くだろう。日本を知つて初めてのIBF会長ブルーナー氏は誰よりも親日的であるがこれは本田会長は勿論高倉氏の功績が大きいと思う。世界バドミントンの動向を日本の主導する何と楽しい夢ではないか。プレーヤーはその地固めを必ず達成してくれる。その時にNBAの首脳はそれに報いるだけの能力を備えているであらうか。本当に全国一致して事に当るの気概を要求されるのが今日ほど強い時はない筈である。

日本のバドミントンが過去でも現在でも将来でも学生プレーヤーが中心であり、中心であつたことは確かであり将来の協会の進路を左右するのは正に諸君であることをよく自覚して一層の健闘を祈り且つ期待してやまない。